

フンボルト大学 日本学科

長坂 水晶

1. 日本語講座の沿革

フンボルト大学 (Humboldt Universität) は旧東ドイツの唯一の日本語教育機関として、長年、日本研究、日本文学紹介、語学教育の中心的役割を担っていた。1887年にフンボルト大学の前身であるフリードリヒ大学にアジア語講座が開講され、それと同時にルドルフ・ランゲ、井上哲次郎によって日本語講座も開講された。ナチの同調者が指導的地位にあったナチ時代を経て、1968年には日本学科はアジア・アフリカ学部所属となる。研究者、通訳翻訳家の養成を目的に日本語教育が行われた。少数精鋭で集中的な教育が行われ、卒業生は文化省や高等教育省といった省庁で働く公務員や大学教師を始め、在東独日本企業の社員等、幅広い分野で活躍してきた。

1990年より統一ドイツ大学法の下、講座を一般にも開放。日本学専攻生や聴講生を対象に、日本学基礎課程としての語学教育が行われている。フンボルト大学の日本学科からは、これまで多くの文学・思想・歴史・経済の研究者を生み出したとともに、多数の翻訳を出してきた。

2. 教師

現在専任講師は、日本人が、文学や翻訳を担当する者と派遣専門員の2名で、ドイツ人は日本語担当が2名、歴史が2名で、計4名である。この他に通訳・翻訳・漢字の必須講座は、各学期の必要に応じて非常勤講師が担当する。

尚、1995年10月には、チュービンゲン大学から Kracht 教授を迎えることになっておりスタッフの異動も予想される。

3. 学生

95年6月現在、学生数は1年が25人、2年が25人、3年が14人、4年が12人、5年が8人である。統一以来、学生数は大幅に増加した。学生は旧東地域の出身者が約3分の1で、やはり多いが、この傾向も毎年変わってきているようである。

また、中国、韓国、日本、ベトナム、アメリカ、イタリア、ロシア等、様々な国からの留学生がおり、ドイツ人以外の学生が多いのも特徴的である。

学生は主専攻2つか、主専攻1つと副専攻2つを選ぶ必要があるが、専攻の主・副に係わらず、どの学生も同じレベルの日本語教育を受けるカリキュラムになっている。

学生の日本語以外の主な専攻科目は、経営・経済・歴史・政治・法律・文化(思想、宗教)・文学・日本語以外の語学など多岐にわたっている。

学生は日本文化、日本事情、日本研究への関心が高く、学習意欲の高い学生が多い。

但し、口頭練習のクラスでは、間違いを恐れずに活発に参加するというより、教師の指示を待つ、というおとなしい学生が目立つ。

留学や旅行の希望者、経験者は多い。現在、日本へ留学している学生は9名で、その内6名は東海大学への交換留学生である。大学間の協定で、東海大学へは毎年6名の学生が留学可能になっている。

学習の動機は様々だが、日本研究の手段としてだけでなく、将来の職業（通訳、翻訳や日系企業への就職）のために学習している者も多い。

卒業生は毎年8～10名である。在独日系企業、在日ドイツ企業、日本関係の研究機関などに就職する者がある他には、日本へ渡ることを目的に、日本でのドイツ語教師になる者もある。

4. カリキュラム

年度により少しずつカリキュラムが異なるが、例として95年度冬学期(94年10月～95年2月・約13週)の日本語の授業の場合をあげてみたい。尚、1コマは90分である。

科目名	週コマ数	主な教材
1年 文法	3	『新日本語の基礎』
漢字	0.5	
ビデオ	0.5	『ヤンさん』『日本語教育映画』
会話	2	『Situational Functional Japanese』など
2年 作文	1	『日本語作文I』など
速読	1	新聞・雑誌による自主教材
文法・翻訳	2	『Grundkurs der modernen japanischen Sprache』
3年 速読	1	新聞・雑誌による自主教材
翻訳・文法	2	〃
4年 翻訳	2	〃
通訳入門	1	〃
5年 翻訳	1	『現代ドイツを考える』（三修社）など
文学	1	加藤周一『日本文学序説』など
講読	1	新聞・雑誌による自主教材

この他に、書道、経済、歴史などの選択科目がある。

5. 日本学科の特徴

フンボルト大学日本学科の通訳・翻訳コースは、全ドイツの大学の中で唯一であり、力を入れている。(但し、97年9月をもって通訳・翻訳コースは終了する。)

学科としては伝統的に会話・聴解・読解・作文の四技能をバランス良く身につけさせるような教育を行っている。また、フンボルトの学生の会話能力には定評があり、会話能力の獲得のためにフンボルト大学へ受講に来る学生も多い。特に入門期にはドイツ人による文法説明の授業のあとに、日本人の日本語による会話の授業を行うという方法をとっており、早い時期から、コミュニケーションのための日本語を身につけさせることができるようになっている。

しかし、旧東独時代に行われていた、集中的な日本語教育 — 少数精鋭で、学生の個性に応じて行われた指導 — がなされなくなり、且つ、新しい教授を迎えようとしている今、フンボルト大学のありようは、また大きく変わると思われる。

6. 問題点

新しい日本事情を紹介できるような視聴覚教材の不足があげられる。また時事的な教材、特に通訳・翻訳のクラスで使用できるような既成の教材が少なく、常に教師が自主的に作成したものを、経験に基づいて使用している。

また、壁の崩壊後、学生が増加したことに伴って、教師の数が不足しているのも深刻な問題である。